

【3】生徒の実態

[1] 集団編成

表-2 高等部の集団編成

学年	生徒		担任		主な障害	本校への入学時期
	男	女	男	女		
1年	5	2	0	2	・自閉的傾向 ・9Pマイナス症候群	小学部→2人 中学部→2人 高等部→3人
	7		1	1		
2年	8	0	1	1	・自閉的傾向 ・ダウン症 ・感覚統合不全 ・てんかん ・脊柱側湾症	小学部→2人 中学部→5人 高等部→1人
	8					
3年	6	2	1	1	・脳性麻痺後遺症 ・てんかん ・水頭症 ・自閉的傾向 ・プラダーウィリー	小学部→3人 中学部→4人 高等部→1人
	8					
計	23		担任外4		入学時期：小～7人 中～11人 高～5人	

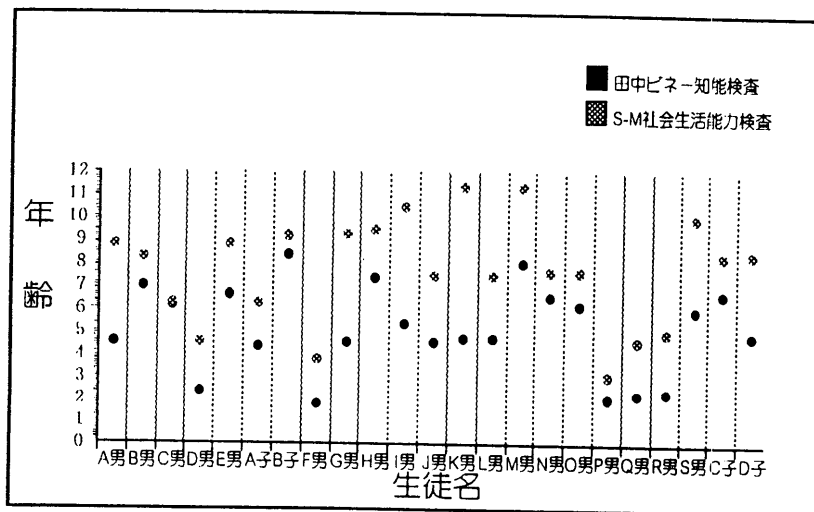
高等部は1学年1学級制である。今年度の高等部は23名の生徒で編成されている。そのうち男子が19名、女子が4名と8割以上が男子という構成になっている。入学時期をみると小学部から本校に入学している生徒が7名、中学部から入学した生徒が11名、高等部から入学した生徒が5名である。それぞれのクラスは表-2のとおり様々な障害を持った生徒で編成されている。

生徒が7名、中学部から入学した生徒が11名、高等部から入学した生徒が5名である。それぞれのクラスは表-2のとおり様々な障害を持った生徒で編成されている。

[2] 諸検査からみた生徒の実態

本年度も、生徒一人ひとりの学習課題を明らかにするために、また検査の結果から高等部全体の傾向や生徒一人ひとりに対する指導を行う際の参考資料とするために田中ビネー知能検査、S-M社会生活能力検査、WISC-R知能検査を行った。(田中ビネー知能検査、WISC-R知能検査は入学年時に実施。S-M社会生活能力検査は全学年とも平成9年5月に実施)

図-1 田中ビネー知能検査とS-M社会生活能力検査

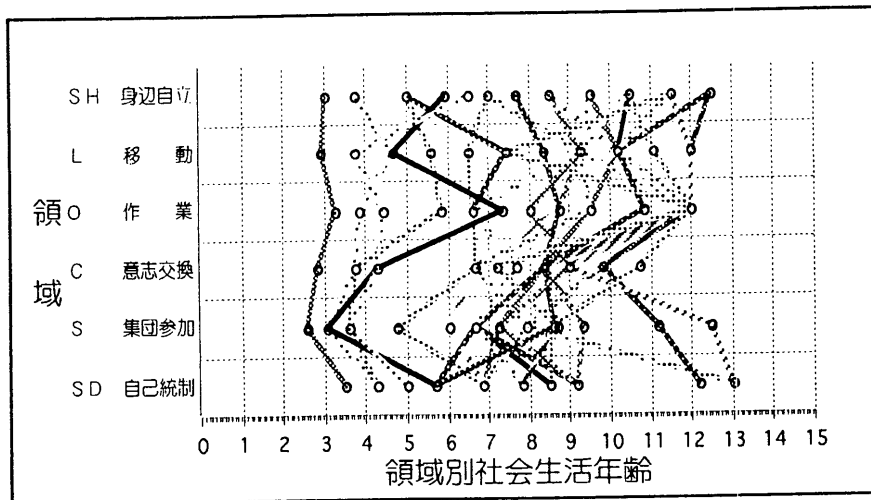


田中ビネー知能検査の結果(図-1)をみると、高等部全体で1歳10か月の生徒から8歳4か月の生徒までの約6歳半の開きがみられる。田中ビネー知能検査の結果から、高等部の生徒はひもとおしや積木つみなどの動作問題、生活に密着したものの説明や理解、その場で記憶したものを再生することなどはできるが、9歳あたりで獲得され始める抽象

その場で記憶したものを再生することなどはできるが、9歳あたりで獲得され始める抽象

語や推理といった目に見えないことやものを考えることを苦手としており、9、10歳の質的転換期を乗り越えるまでには達していないことがわかる。

図-2 S-M社会生活能力検査 下位項目



次にS-M社会生活能力検査の結果をみてみる。社会生活年齢は生徒の発達年齢に加えて、その生徒の生活環境が大きく作用するものである。そこで、図-1をみてみると、3歳1か月の生徒から11歳4か月の生徒まで

の8歳3か月の社会生活年齢の開きがみられる。さらに、S-M社会生活能力検査の下位項目(図-2)を個人別にみると、23名中9名の生徒で「作業」の項目が一番高くなっている。反対に一番低い項目となっているのが「集団参加」となっており、23名中12名である。また「意志交換」の項目が一番低い項目となっている生徒が23名中1名いる。このことから高等部の生徒は、作業能力よりも他者との関わりという点が低くなっているということが伺える。この結果から、家庭における生活環境、学校における生活環境それぞれを、個に応じて整え、さらに豊かな生活経験や適切な指導を行う必要があると考える。

WISC-R知能検査も入学年時に行っている。その結果をみてみると、言語性IQで45を上回る生徒が2名、動作性IQで45を上回る生徒が8名であり、言語性IQと動作性IQを総合した全体的な知能指数で45を上回る生徒は、4名であった。また、測定困難な生徒は3名いた。測定できた全ての生徒において、動作性IQが言語性IQを上回った。そこで、高等部の生徒に対する授業を行う際には、言葉で説明することよりも、実際に体験する、本物を見る、本物に触れるといったような視覚、感覚に訴える教材・教具を工夫することが必要となってくる。以上のような実態や課題に基づいて、高等部では幅広い段階の生徒に対応しながら、個に応じたきめ細かな配慮、指導がなされる必要があると考える。

[3] 自分づくりの段階表による生徒の実態

教師が生徒の「めざす姿」を設定し、人格の形成を中心として高等部が独自に作成した「自分づくりの段階表」があり、その段階表に生徒を当てはめてみると、P117のようになる。それによると、「自我の拡大・充実(3歳前半)」の段階にいる生徒が2名、「自制心の芽生え(3歳後半)」の段階にいる生徒が8名、「自制心の形成(5歳

半)」の段階にいる生徒が7名、「自己客観視の芽生え（5歳後半）」の段階にいる生徒が5名、「自己客観視の形成（9歳～）」の段階にいる生徒が1名となっている。自分づくりの段階表のめざす具体的な姿からみてみると、「～がしたい」という意思を持ち、自分なりの活動ができる、またはできつつある生徒が23名中15名いる。さらに、自分を取りまくまわりとの関係を意識し、自分を見つめなおすことや自分の活動に見通しをもつことができる、またはでき始めている生徒が6名いる。

〔4〕学校での生徒の様子

高等部は、本校中学部からの連絡入学生と中学校からの入学生で学年7～8名の集団を編成し、生活を共にしている。連絡入学生は、中学部での生活に引き続いて比較的スムーズに高等部の生活にはいることができる。一方他校からの入学生は、入学当初は環境の変化に戸惑い、なじむまでに少々の時間がかかる。しかし、学級の人数が少人数であること、学年の枠を越えた学習活動も多く取り入れられていることなどから、徐々に学部仲間と親しくなり、1学期が終わる頃には、本校中学部からの連絡入学生と他校からの入学生は、ともに協力しあい助け合いながら毎日の生活を送るようになってきている。また、言われたことに対して素直に取り組み、誰とでもすぐに打ち解けて話ができる生徒が多い。しかしその反面、自分で判断して積極的に行動したり、マナーをわきまえて接したりすることは難しい。

また、生徒は高等部ということで、生徒会や委員会の委員長など学校内において責任のあるポジションで活動を行っている。さらに、高等部内における集会なども実行委員会を設け、集会の計画、運営を行っている。しかし、すべてを自分たちの力で話し合ったり準備したりすることはなかなかできない。そこで教師の支援が必要であるが、生徒の話し合いすべてに支援をする必要はなく、教師の最小限の支援で話し合いはできる。

休憩時間の過ごし方をみると、生徒一人ひとりがそれぞれ休憩時間の過ごし方、楽しみ方を持っている。図書室で本をみる生徒、音楽を聴く生徒、音楽室で歌を歌う生徒、視聴覚教材室でコンピューターに触れる生徒、体育館で友達と運動を楽しむ生徒など、それぞれ時間いっぱい楽しんでいる姿が見られる。これは、レーザーディスクやコンピューターの導入など、研究を進めるなかで生徒が楽しめる場を意図的に設定し、働きかけてきたことの成果でもある。しかし、自分の力で楽しみ方を増やしたり深めたりすることは難しい。

生徒たちは、職業科の学習や校内職業実習、現場実習等の積み重ねにより、働く態度や意識が育ってきている。係り、当番の活動、掃除や片づけ、用事を頼まれたときなど率先してよく働く姿が見られる。

家庭生活でも、自分の役割を決め、継続して取り組んでいる生徒が多い。休日にはテレビやCDや読書を楽しんだり、家族と買い物やドライブに出かけたりする生徒が多い。また、体操教室やウォークラリー、マラソン大会といった様々な会や行事に参加する生徒も少しずつ増えてきている。

(坪倉嘉隆)